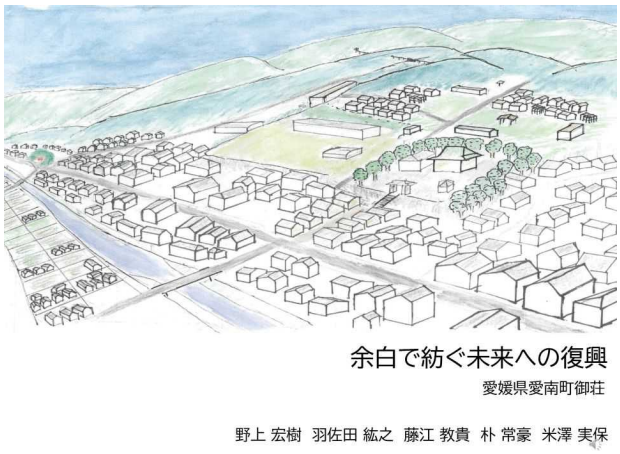
学生が考える宇和海沿岸域の
小さな事前復興プランの提案（ビデオ発表）

余白で紡ぐ未来への復興
（愛南町御荘地区）

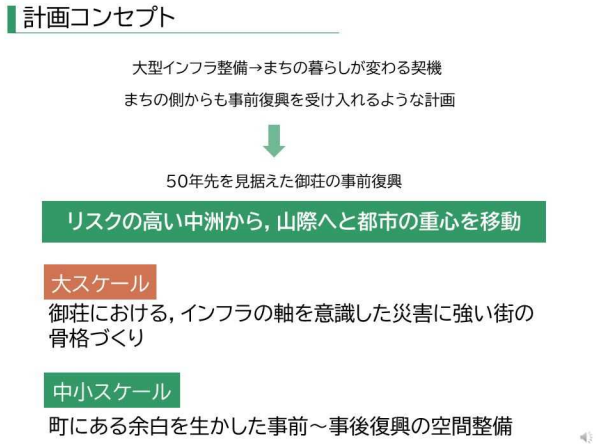
東京大学　野上宏樹・羽佐田紘之・藤江教貴
朴 常豪・米澤実保

私たちは愛南町の中心部御荘地区の事前復興計画を作りました。御荘にこれからできる高速道路を事前復興に生かすにはどうすればよいか，そして防潮堤の計画がありますが，それができるということは低地部に人が住み続けるということですから，迅速な避難をするためにはどうすれば良いかといことを考えました。
そして，阪神大震災や東日本大震災では孤独死やコミュニティの分断といった問題が起こりましたが，こうした課題を解決するために少し挑戦的な提案もしています。



さて，事前復興を私たちは，人々の営みが積み重なってきたまちを変化に対応して未来へ引きつぐための計画ととらえ，「余白で紡ぐ未来への復興」というコンセプトでプランを考えました。

御荘は，愛南町の中心，四国八十八か所の裏関所である観自在寺の門前町として，発展してきました。2 本の川が市街地を通って御荘湾に流れており，集落は山に張り付くように成立しました。しかし，1970 年代に国道が，低地の中州部に開通して以降，中州が宅地化し，南海トラフ地震による津波浸水のリスクが高まっています。
現在，御荘には国によるインフラ整備計画として，高速道路計画と防潮堤計画があります。今回はこれらと絡めて，50 年先までの事前復興ビジョンを長期的に描きます。



提案の目標は，リスクの高い中洲から山際へとまちの重心を移動することです。私たちは事前復興の実現にむけた整備方針を，2 つのスケールで考えます。大きなスケールでは，リスク低減や迅速な避難を意識して町の骨格としての軸を整えること，中小スケールでは，地域に点在する余白を生かした，事前段階から事後復興までの空間整備をします。

以降は，ここで述べた連動する 2 つのプランを説明します。

はじめに，軸で描く御荘都市骨格の変換です。現在，御荘の骨格を形作っているのは，低地の国道と，昔からある商店街の道の 2 つです。
これを，高速道路整備に伴い，5 つの軸としてとら

えなおすことで，避難をわかりやすくするとともに，土地の使い方を変化させ，まちの重心を高台へと移動させることを目指します。

地域の主要な移動動線は全て横方向ですが，避難の際には縦動線が重要な役割を果たします。特に観自在寺までの参道の軸をさらに一時避難場所まで伸ばし，そのまま避難動線として活用します。

具体的には，地元の人や観光客など日常の動線が自然と避難動線になるように配慮しながら，参道と延長の避難軸を次の 3 段階の整備によって伸ばしていきます。

（Step1）まずは，既存のお寺への人の流れを生かして，参道沿いに，一時避難場所への避難サインを設置します。

（Step2）次に，高台の一時避難場所に東屋を設置します。東屋は，平時にはイベントの場として活用されます。これによって，高台への意識がつき，同時に避難道も認識されやすくなり，有事には雨風をしのぐ場所となります。

（Step3）整備の最終段階として，現在は耕作放棄地となっている土地に事前復興住宅などをたてます。事前復興住宅の詳しい説明は後程します。

以上のように既に使われている道を軸として高台までつなぎ，周辺の土地を活用することで，御荘のまちの軸を低地から高台へと移します。

続いては，中小スケールで余白に着目したプランを説明します。

現在御荘には，写真のような空き地，いわば余白が点在しています。一般に余白というと，活用されていない土地のイメージがあるかもしれません。しかし，事前復興の観点からみると，余白は場所の空間的特徴に合わせて，事前，発災，復興の各段階に合わせて自由度が高く多種多様なニーズを受け入れることができる資源となります。

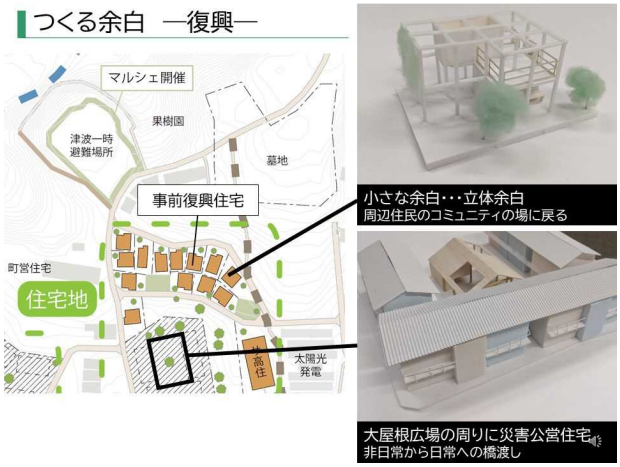
今回は，このような余白を「つくる余白」と「いかす余白」の 2 つに分け，事前から復興までの段階を滞りなくつなぐことを考えます。

初めに「つくる余白」として，先ほど触れた事前復興住宅を含めた高台住宅地の余白活用について説明します。高速道路開通によって，従来はまちの裏側というイメージが強かった高台の利便性が上がります。そこで高台に事前復興住宅を図のように配置し，被災前から高台の住宅を活用します。事前復興住宅に混ぜる形で，小さな立体余白と大きな大屋根広場を事前に整備します。

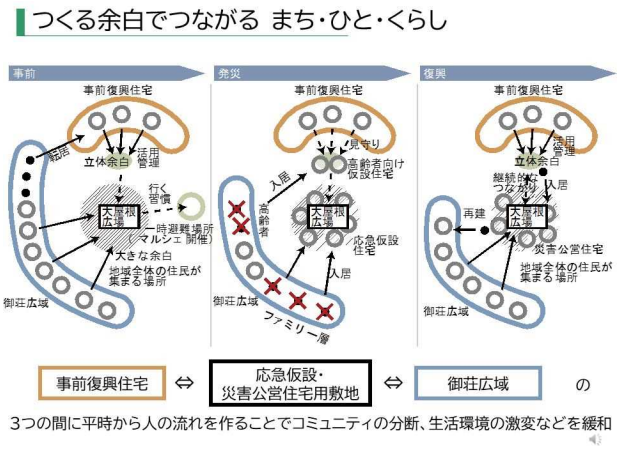
立体余白は事前復興住宅の中に位置し，高台住宅地の住民が使う場所として機能します。立体余白の特徴は，余白を立体にすることで，空間に変化が現れ

活用幅が広がることや床を張ることで草刈りなどの維持管理が簡単になることです。
一方，大屋根広場は，平時からより広域的な住民の憩いの場とすることで，高台の一時避難場所と低地の住民の距離を縮めます。

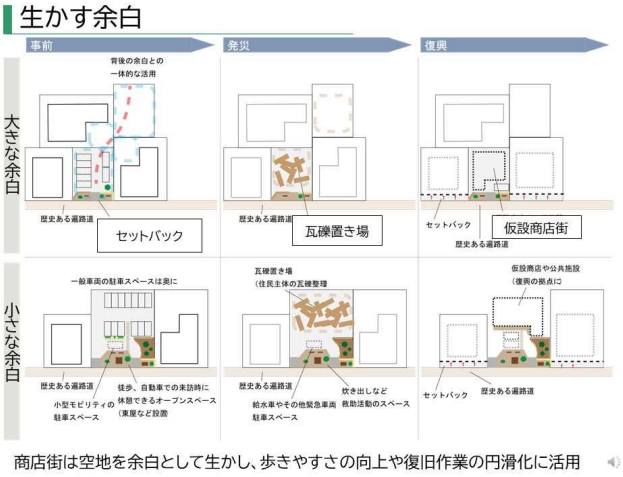
発災後，立体余白のフレームに被災後はそのまま壁をはって余白を仮設住宅に転用することができます。周りに既に形成されているコミュニティに見守られるので，高齢者も安心して過ごすことができます。
大屋根広場の周りには仮設住宅を置きます。平時から住民が集まる場所がそのまま生活の拠点となるので，日常と非日常の間にあるギャップを埋めることができます。



復興後，立体余白は周辺住民のコミュニティの場に戻り，大屋根広場の周りは仮設住宅から災害公営住宅へと変わります。

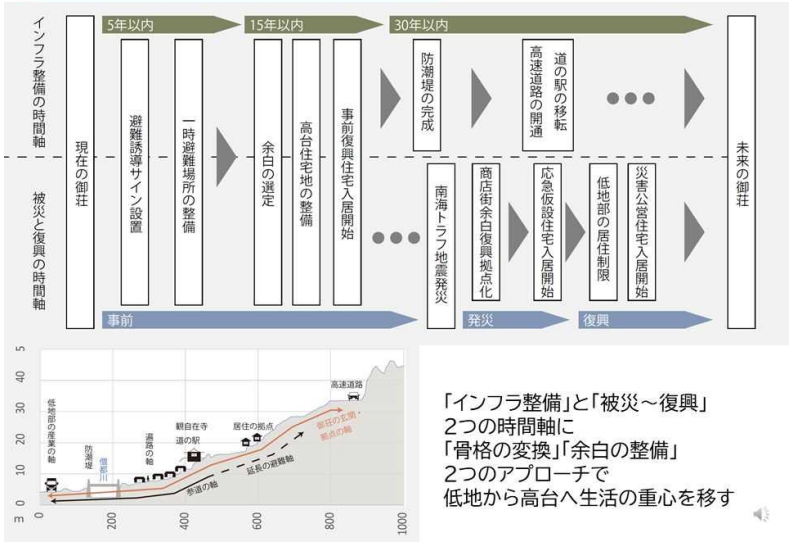


事前復興住宅，応急仮設住宅用の敷地，さらに御荘の町全体という３つの要素の間に，平時から人の流れを作ることで，発災によるコミュニティの分断，生活環境の激変などをやわらげます。



コンセプトである中洲から高台への都市重心の移動をする際に重要な役割を果たすのが，その中間にある遍路道としての商店街です。ここは，現在も公共施設などが集中し町の中心として機能しています。しかし，近年は空き店舗や空き地が増え，一方で道路の幅が狭いなどの課題があります。ここでは図のように，遍路道をセットバックして歩きやすくし，災害時には迅速な復興につなげるためのがれき置き場や仮設商店街として活用することで，余白として生かします。

余白で紡ぐ未来への復興



最後に，一連の計画の時系列変遷の枠組みをふりかえります。災害に強い未来の御荘に向けて，インフラと余白を段階ごとに整備していきます。被災後の転用を考慮した空間整備をすることで，災害という不確実性も受け入れることが可能となり，空間が機能します。

私たちは今回の計画で，今後できるインフラに合わせて，まちの側からも事前復興を進めることを提案しました。日常からわかりやすいまちの骨格を意識づけるとともに，長期的変化を支えるための余白を時系列に合わせてスムーズに転用することで，今を生きる人，これからの未来を生きる人達にたいして，今までつみかさなってきた豊かな暮らしを紡ぎ，復興と街の豊かさを引き継いでいきたいと願っています。